

Gratitude, Excitement, and an Eye on The Future

30th Anniversary | Triathlon Japan

1994-2024 and Beyond

日本トライアスロン連合 30周年記念





To our dear friends and partners at the Japan Triathlon Union, 日本トライアスロン連合の友人・パートナーの皆様へ

Congratulations on this great milestone of reaching 30 years celebrating, showcasing, and advancing our beautiful sport of triathlon
トライアスロンという素晴らしいスポーツの魅力を紹介し発展させてきた皆様が、30年という大きな節目を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

World Triathlon and JTU have shared many incredible moments over the years, working closely to build a partnership
that has truly come to represent all that is great about the World Triathlon Family.

ワールドトライアスロンとJTUは、これまで長きにわたって幾多のすばらしい瞬間を共有し、緊密に連携してきました。
そして、私たちが築きあげたパートナーシップは、ワールドトライアスロンファミリーの素晴らしさを象徴するものとなりました。

Of course, WTCS Yokohama has been at the heart of the biggest Series in the sport for many years,
but it forms the top of a huge amount of experience, passion and development that takes place across your great country,
growing our sport and giving our athletes the best stages on which to perform.

当然のことながら、ワールドトライアスロンチャンピオンシップシリーズ横浜大会は、何年もの間、トライアスロン最高峰のシリーズの中核を担ってきました。
それは、貴国の各地において繰り広げられる経験の蓄積と熱意、そして成長が結実した多くの大会の頂点を極めるもので、
私たちのスポーツの発展に貢献し、アスリートたちが実力を発揮できる最高の舞台を提供してくれています。

So I want to wish a very happy 30th anniversary to everybody at JTU, both those who are there now,
and those who have worked and had an impact over the past three decades.

ですから、私は、JTUに関わってこられたすべての人たち
——今現在も仕事をしている方、そして過去30年にJTUでの取り組みを通じて影響を及ぼしてきた方々——
に30周年おめでとうと申し上げたいと思います。

Here's to many more years working together to share the magic of swim-bike-run!

さらに多くの人々にスイム・バイク・ランの魅力を伝えるべく、
これからも一緒に取り組んでいくあまたの時間を祝して乾杯!

Marisol Casado
World Triathlon元会長 マリソル・カサド

序章

2024年7月末、フランスのパリ市で第33回オリンピック競技大会が開催された。トライアスロン競技は史上最大規模の観客とメディアを集め、セヌ川の河畔に設けられた特設ポンツーンのスタート台からスイム種目が始まった。

さらに3週間後には、同じくセヌ川で3回目のパラリンピック競技大会となるパラトライアスロン競技が繰り広げられ、世界各国から集まった選手たちは沢山の観衆から賞賛を浴び、大会は無事その幕を下ろした。トライアスロンが西暦2000年にオーストラリアで開催された第27回シドニー・オリンピックで、初めて公式競技として実施されてから早や

24年、今やトライアスロンはオリンピック・ムーブメントの揺るぎない中核競技となった。

50年前の1974年に米国西海岸サンディエゴで誕生したトライアスロンは、1989年の国際トライアスロン連合 (ITU: 現ワールドトライアスロン=TRI) 設立から35年、1994年の日本トライアスロン連合 (JTU) 設立から30年が経過した2024年現在、世界約160以上の国と地域に普及している。トライアスロン競技が世界中に広まっていく過程では、アイアンマンレースを含めたすべてのトライアスロン関係者が、



ワールドワイドな友情と連帯の輪を広げ、かつ尊敬の念を持ち、卓越した心技体を深め合ってきた。世界および日本のトライアスリートはもとより、大会・組織の役員やテクニカル・オフィシャル、コーチ（指導者）たちが献身的な努力を積み重ね、絶え間ない進化と変革を繰り返してきたのである。

地球という壮大な自然環境との調和を目指す姿に喜びと感動を与えられる、最もアグレッシブなスポーツであるトライアスロン競技は、わずか50年の間にオリンピック・パラリン

ピックゲームへの参画、アジア競技大会などの大陸別競技会、ワールドゲームズならびに多くの国と都市でのシリーズ（WTCS、WTC、コンチネンタルカップ、アイアンマン、70.3、スーパーリーグ、T100、チャレンジ、パワーマン、ウインター、アクアスロン、クロス、デュアスロン等）関連大会を開催するに至り、人類の平和と友好に寄与するスポーツとしての不変の地位を確立した。



1

1974年～1994年までの20年 成長と発展への模索と基盤づくり～先人への感謝を込めて



1994年4月16日、東京・新宿の京王プラザホテル。国内統括団体として日本トライアスロン連合（JTU）がついに、産声を上げた。設立総会には、全国から集まった代表者らが集結。わが国のトライアスロン競技の統一組織の創立が満場一致で承認された。会長には、当時IOC委員だった猪谷千春氏が選ばれ、JTU設立のための議論の道筋を一貫して主導した佐々木秀幸氏が理事長に就いた。事務局長には、大塚眞一郎氏が決まった。国内のトライアスロン界の悲願だった「大同団結」がかなった瞬間だった。

ここに至るまで、長い年月と関係者の努力が重ねられた。

世界でトライアスロンが誕生したのは1974年9月25日。米国カリフォルニア州サンディエゴのミッションベイで行われた大会だった。主催したサンディエゴ・トラッククラブによれば、短い距離での簡素な大会だった。この時のメンバーやハワイの海兵隊員ら計15名が、オアフ島での大会創設に乗り出した。彼らが主催者、そして競技者となり、1978年にアイアンマンレースを初開催。未知の距離への最初の挑戦だった。

この流れが国内にも訪れる。ハワイのレースに参加した日本のメンバーに対し、鳥取県米子市の皆生温泉組合が、地域振興の切り札として大会開催の協力を依頼。国内で初めてのトライアスロン大会を開催する。1981年8月20日のことだった。

1980年代前半は、世界のトライアスロン関係者たちが競技として、いかに普及、成長させていくか、試練に立ち向かい、模索を重ねた時代でもあった。世界各地でロングディスタンスのアイアンマンレースが開催されたほか、米国のカール・トーマス氏が創始した総距離51.5kmというショートディスタンスのUSTSが提案され、米国を中心に賞金レースなど、さまざまな大会が展開されていく。1981年にハワイのコナで開催された第4回のアイアンマン大会には、8名の日本人が参加。101位を記録した勝尾弦選手や当時56歳の堤貞一郎選手をはじめ、全員完走を果たした。

組織面、財政面の整備も進められ、大会主催者と民間企業の間でのスポンサー契約や、競技団体として米国トライアスロン連盟（現USAT）や欧州でのヨーロッパアンチトライアスロンユニオン（ETU）の設立が実現した。1984年ロサンゼルスオリンピックが商業面で大きな成功を収め、スポーツ界が民間



資金による競技会運営に舵を切りつつあった時代。アマチュアリズムからの転換が進んだこの流れを先取りするかのように、トライアスロン界は先進的な取り組みを重ねていった。

国際的な機運の高まりに呼応して、わが国でも日本複合耐久種目連絡協議会（のちの日本トライアスロン協会=JTA、清水仲治会長）の旗揚げや、日本トライアスロン連盟（JTF=長嶋茂雄会長）の設立など、中央団体の結成に向けたトライアスロン関係者の動きが活発化した。また、1984年にランナーズ社から「トライアスロンジャパン誌」が発行され、全国的規模でトライアスロートの輪が急速に拡大した。

そして迎えた1985年、日本のトライアスロン元年というべきブームが到来する。

第一弾は、同年4月に沖縄県の宮古島で行われたトライアスロン大会である。島の観光事業の活性化を目的に、日本航空（JAL）と南西航空（現日本トランスオーシャン航空=JTA）が現地の東急リゾートホテルと共同で大会に協賛。NHKは離島放送実験を兼ねて、大会の様態をリアルタイムで全国放送した。この大がかりな仕掛けが、トライアスロンブームに火を付けた。

同年6月にはハワイ・アイアンマンレースのディレクターのバレリー・シルク氏が広告会社の電通と提携し、アイアンマンジャパンinびわ湖大会を開催。さらに10月には、海外版權ライセンス会社のユニインセンティブ/エトナライセンスがジャパントライアスロンシリーズ（JTS=USシリーズの日本版）を提唱し、熊本県本渡市（現天草市）で第1回天草国際トライアスロン大会を開催した。この天草大会が日本においてオリンピックディスタンスという、総距離51.5kmのショートトライアスロンの始まりであり、トップ選手たちの受け皿として「チームエトナ」も設けられた。

天草大会を成功に導いたJTFは、その後も静岡県の日平や

宮城県の仙台、岐阜県の長良川など、全国各地でオリンピックディスタンスの大会を開催する。1990年にはNTT（日本電信電話株式会社）の電話100周年事業において、NTTトライアスロンサーキット（全国13大会）がスタート。以後、NTTは今日に至るまで日本のトライアスロンを支え続けてきている。

バブル全盛の好景気だった時代。テレビCMでは「24時間働けますか」とのフレーズが大流行した。「鉄人レース」を標榜し、己の限界に挑むトライアスロンは、右肩上がりの時代に奮闘する社会の人々を象徴するかのようにであった。一方、スポーツ中継は野球や相撲、ボクシング、プロレスなど、まだまだ限定的で、ようやく箱根駅伝やマラソンの放送が始まったばかりの時期。トライアスロンは競技として始まって間もない段階にもかかわらず、テレビと民間企業を巻き込んだ新時代のスポーツマーケティングを取り入れながら、まさに当時の日本社会を象徴するように、勢いを加速させていったのである。

他方、世界ではオリンピック参入への動きも進んだ。1984年ロサンゼルスオリンピックでは、トライアスロンのデモンストラーションが行われるなど、総距離51.5kmのトライアスロンのオリンピック採用に向けた活動が活発化。国際組織の整備、統合も進められ、1984年10月8日には、国際トライアスロン連盟（FIT）が米国ハワイ州コナで設立され、日本の代表団体としてJTFが日本支部の位置づけで加盟した。さらに、世界的な普及を目的として欧州メンバーとFITが合流し、1987年に世界トライアスロン連盟（TFI）も設立された。

トライアスロンと同様に複数種目で競う競技との協調を模索したこともあった。1988年8月19日から21日、当時の国際近代五種バイアスロン連合（当時=UIPMB）がスウェーデンの首都ストックホルムで開いた理事会で、UIPMBがFITを併合する形でトライアスロンをオリンピックの正式競技として迎え入れるかどうか、議論が行われた。日本からは、国際的な窓口となる機関としてJTFとJTAが暫定的に設立した日本トライアスロン



委員会 (JTC) も参加した。しかし、協議は不調に終わり、トライアスロンは独自でオリンピックへの参画を目指すことが再確認された。

こうして発足したのが国際トライアスロン連合 (ITU) である。1989年3月31日から4月1日、フランスのアヴィニオンでの総会で正式に創設され、初代会長にレス・マクドナルド氏 (カナダ) が就任。オリンピック競技への正式提案、アイアンマンとの協働など諸課題について検討を始めた。8月には第1回世界トライアスロン選手権が同地で開催された。日本からはJTCとして初のナショナルチームを編成し、男女合わせて9名の選手を日本代表選手団として公式派遣した。

マクドナルド会長は1989年6月に来日。JTS日本平大会の会場において、JTFとJTA両者の立会人として、国内統一組織の立ち上げを強く要請した。日本に対してはITUへの参加、協力はもちろんのこと、アジアにおけるトライアスロンの普及も強く期待されていた。オリンピックでの採用には、世界各地で普及していることが必須条件だったからである。1990年、JTFと総合商社の丸紅が中心となり、中国・北京市でトライアスロン・ワールドカップの開催を実現。1991年にはアジア・トライアスロン同盟 (ASTS) も設立された。こうした取り組みにより、5大陸・90カ国以上の競技普及条件がクリアされた。

オリンピック採用に向けアジアでのリーダーシップを期待され、着実に役割を果たしつつあった日本は、いよいよ国内でも中央組織の統一、整備の必要性に迫られていく。

トライアスロン界のシンクタンクとして学識経験者やトライアスロンクラブの代表者ら、有志により「トライアスロンを発展させる会 = 佐々木秀幸代表」が結成された。同会は、1989年11月に「トライアスロンの将来を語るつどい」と題したシンポジウムを開催。日本の中央組織の創立と、全国のトライアスリートの大同団結の必要

性を訴え、日本のトライアスロン界の統一機運が一気に高まった。

日本のトライアスリートおよび組織、推進団体、大会主催者などトライアスロン関係者は「大同団結」しなければならない。この1点において、小異を捨て大同に着く道を進めていくことが、日本のトライアスロンを成長、発展させる唯一の道であり、ひいては世界のトライアスロンとの連携強化が促進されるとの認識が強まり、1990年代に入り「日本トライアスロン連合 (JTU)」の結成に向けた動きが本格化した。

「トライアスロンを発展させる会」の主催により、1993年1月19日に「全国トライアスロン代表者会議」が開催され、JTU設立に向け検討を進めていくことで参加者たちが合意した。次いで、トライアスロン・イベント会社のジャパンスポーツマネージメント (JSM) の支援のもと、JTAとJTF双方の解散と統合を目指す「JTU設立準備委員会」が設立された。以後、大小合わせて54回もの会議が精力的に行われる一方、全国的な規模で国内トライアスリートの意見を集約する作業や各種会合も盛んに開かれ、「大同団結」のための道筋が議論されていった。

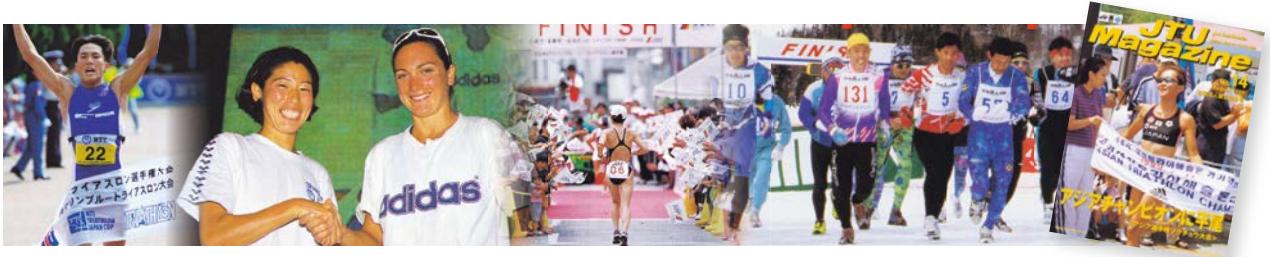
意見交換や議論は多岐にわたったが、1年余りに及ぶ各コミッティ参加者たちの熱心な議論と意見集約を踏まえ、合意形成が進んだ。1994年3月の「JTU設立発起人会」において、新組織の定款内容が固まった。ようやくトライアスロンの未来へ向けて大同団結するというコンセンサスを結実させる時がやってきた。4月16日、晴れて設立総会を迎える。ITUのマクドナルド会長も参加した中、発起人からJTU設立の提案がなされ、承認された。

同年9月には国際オリンピック委員会 (IOC) がパリの総会において、トライアスロン競技を正式競技として承認した。2000年のシドニー大会でのオリンピック・デビューが決まった。国内でもJTUが日本オリンピック委員会 (JOC)、日本体育協会への準加盟が認められた。

1994年～2024年までの30年

連合設立からの歴史の年譜

2



1994年

JTU設立のための暫定評議員会設立(1月) 第2回暫定評議員会と第26回JTU設立準備委員会の合同会議を開催(2月) 第1回JTU設立発起人会(世話人代表に佐々木秀幸氏)開催(3月) JTU設立総会開催(東京)。会長に猪谷千春氏。理事長に佐々木秀幸氏。事務局長に大塚眞一郎氏(4月) (財)日本オリンピック委員会(JOC)、(財)日本体育協会に準加盟 国内初のITU天草ワールドカップ(ドラフティング禁止)開催(5月) ITUワールドカップ大阪ウォーターフロント大会開催。国内初のドラフティング許可レース(6月) 猪谷会長がアジア・トライアスロン同盟副会長に就任(7月) IOCがトライアスロン競技を承認(9月)

1995年

ITUワールドカップ蒲郡大会開催(7月) 日本トライアスロン選手権開始(岐阜県海津町)(7月) 猪谷会長が国際トライアスロン連合理事に就任(11月) JTUジュニアプログラムの開始。オールキッズトライアスロン大会(9月東京都立川市)始まる。

1996年

JTU日本トライアスロン・グランプリ表彰始まる(1月) ITUワールドカップ石垣島大会開催(以降、毎年)(5月) 猪谷会長が国際トライアスロン連合副会長に就任(8月) 日本ジュニアトライアスロン選手権開催(福岡県玄海町)(8月) 日本ロングディスタンストライアスロン選手権開催(新潟県佐渡島)(9月)

1997年

庭田清美選手がITUワールドカップで日本人初のメダル(2位)獲得(蒲郡大会)(7月) JTU加盟団体事務局長会議開催(東京)(11月) FISU世界学生選手権に日本選手団派遣。JTU認定記録会を開催(神奈川)

1998年

全国一斉公認審判員試験開催(以降、毎年)(2月) (財)日本体育協会に正式加盟(3月) マルチスポーツ・インターナショナル(MSI)設立。JTUのマーケティング部門を担う(6月) 日本スプリントトライアスロン選手権開催(東京都港区)(7月) 新潟県佐渡島でITUロングディスタンストライアスロン世界選手権開催。志垣めぐみが日本人初のメダル(3位)獲得(9月) 日本ロング・ディスタンス・デュアスロン開催(秋田県森吉町)(10月) JTU公認初級指導者制度発足。

1999年

日本ウィンタートライアスロン選手権開催(北海道トマム町)(3月) 第1回のJTU社員総会(設立総会)開催(7月) 日本トライアスロン連合の文部科学省管轄の社団法人承認(7月) 全日本高校生大会開催(神奈川県大磯町)(8月) (財)日本オリンピック委員会に正式加盟(10月) 日本女子エイジグループ選手権開催(鹿児島県奄美大島)(11月)

2000年

第9回アジアトライアスロン選手権・大陸別オリンピック選考開催(愛知県蒲郡市)(4月) 日本男子エイジグループトライアスロン選手権開催(熊本県本渡市)(6月) ITUワールドカップ東京港大会開催(7月) シドニー・オリンピックでトライアスロン競技実施。日本選手団派遣(ヘッドコーチに飯島健二郎)(8月) シドニー・オリンピック競技運営に日本人国際審判員、上訴委員派遣(8月) JTU初級指導者・中級指導者システムが完成。講習会スタート。

2001年

JTUちびっこ・ジュニアトライアスロン教室開始(4月) 日本デュアスロン選手権開催(福井県小浜市)(6月) 山口県きらら博覧会会場でITUワールドカップ山口大会開催(8月)

2002年

全国の小中学校1万3500校にビデオ・雑誌によるトライアスロン教材配布(4月) FISU世界学生トライアスロン選手権開催(石川県七尾市)(8月) 国民体育大会高知大会で、デモンストレーションとしてのスポーツ競技でアクアスロン採用(8月) ITUワールドカップ幕張大会開催(10月) 中山正夫氏がアジア・トライアスロン同盟副会長に就任(12月)

2003年

縦野大作選手(岡山県)が日本人初のITU世界エイジグループトライアスロン選手権(スペイン)で優勝(5月)

2004年

日韓親善トライアスロン大会開催(韓国・ソクチョウ)(6月) アテネ・オリンピックでトライアスロン競技実施。日本選手団の派遣(ヘッドコーチに三宅義信氏)(8月) 大塚眞一郎氏が国際トライアスロン連合理事に就任(12月)

2005年

ITU世界トライアスロン選手権大会(エリート、U23、ジュニア、アクアスロン計8部門)の開催(愛知県蒲郡市)(9月) SEAゲームでトライアスロン実施(フィリピン・スビックベイ)

2006年

第15回アジア競技大会ドーハ大会で初のトライアスロン競技実施。上田藍選手が銀メダル、関根明子選手が銅メダル獲得。JTUエイジグループランキングがスタート。トライアスロン議員連盟(会長:岩城光英参議院議員)設立。





2007年

JTUスーパースプリントシリーズが開催(酒田・小名浜・銚子) B&G財団、日本ライフセービング協会との連携で「ウオータースポーツプロジェクト」が始まる。コナミスポーツクラブと法人契約(JTU会員特典) JTU WEBマガジンで動画配信サービスが開始。

横浜国際トライアスロン大会等組織委員会設立(8月) 第1回スパトライアスロンいわき大会開催(9月) NHKにて、日本トライアスロン選手権東京港大会の全国放送が始まる(10月) 田山寛豪選手が日本人初のワールドカップ優勝(エイラート大会)(12月)

2008年

北京オリンピックでトライアスロン競技実施。日本選手団派遣(ヘッドコーチに山根英紀氏)井出樹里選手が5位入賞(8月) 横浜港トライアスロンコースで海水美化環境保全活動が始まる(8月) トライアスロンフェスティバル(小中高校生親子)開催(東京都)(9月) 第1回アジアビーチゲームス開催(インドネシア・バリ島)(10月) 国民体育大会トライアスロン正式競技に決定(2016/岩手国体)(10月) 国際トライアスロン連合(ITU)会長にマリソル・カサド氏(スペイン)が就任。レス・マクドナルド前会長は名誉会長。猪谷千春前副会長は名誉委員。大塚眞一郎理事が再任。和田知子委員がITU女子委員会委員長に選任(11月)

猪谷千春JTU名誉会長談話「JTUは設立当初からオリンピックでのメダル獲得を目指して活動を始めました。そして、2008年の北京オリンピックでなんと井出樹里選手が、メダルまで27秒差の5位と健闘し、日本トライアスロンの未来に明るい光を灯す快挙を達成し、関係者一同驚喜乱舞したことを懐かしく思い出しています。改めて井出選手と当時の指導者である飯島コーチ、並びにナショナルチームスタッフに感謝の意を表します。」



2009年

オーストラリア・ユースオリンピック・フェスティバルに日本ジュニア代表選手団派遣(1月) JTU新会長に岩城光英参議院議員が就任。猪谷千春前会長が名誉会長に就任。常務理事に大塚眞一郎理事が再任(4月) 井出樹里選手が日本人女子初のワールドカップ優勝(石垣島)(4月) JTUがオスカープロモーションと業務提携(4月) JTUトライアスロン・アカデミー・プロジェクトスタート(4月) 横浜港開港150周年記念事業ITUトライアスロン世界選手権シリーズ横浜大会/世界こどもスポーツサミットin横浜/世界キッズトライアスロン大会開催(8月) 古橋広之進JTU顧問(日本水泳連盟名誉会長)逝去(8月) トライアスロン議員連盟の会長に橋本聖子参議院議員が就任(9月) 新潟国民体育大会でトライアスロンが公開競技(開催地・村上市)(9月) 2016年オリンピック開催地がリオデジャネイロに決定(10月) ロンドンオリンピックナショナルチーム結成(ヘッドコーチ:飯島健二郎)(10月)

2010年

第1回ユースオリンピック(2010/シンガポール)でトライアスロン競技実施。佐藤優香選手が第1回大会第1号となる金メダルを獲得(8月) ハーフアイアンマン70.3常滑開催(愛知県)(9月) 第16回アジア競技大会(2010/広州)でトライアスロン競技実施。女子足立真梨子選手、男子 細田雄一選手が金メダルを獲得(11月)

レース後、佐藤優香選手は「トライアスロンの金メダルがユースオリンピックの最初のメダルとなることは知っていた。この金メダルを取ることを目標に頑張ってきたので大変嬉しい。」と語った



2011年

3月11日に発生した東日本大震災の影響で5月開催予定の世界トライアスロンシリーズ横浜大会が9月に延期開催、世界各国からの支援の声が横浜に届く。

横浜組織委員会 大久保孝志総長談話「震災の報を受けて、世界各国の選手から心配や支援の声をいただいたことや、自ら来浜していただいたマクドナルド名誉会長からの激励など、横浜への強い想いをいただいたことは忘れません。中止ではなく9月に延期開催出来たことにより、東北と繋がる横浜の海で選手たちが泳ぐ姿を通じて『日本は大丈夫です』ということを横浜から世界に伝えられた。」

マリソル・カサドITU会長がIOC委員として最初に被災地の仙台七ヶ浜町に公式訪問(9月)

2012年

アジアトライアスロン選手権が千葉県館山市にて開催され、男女共に日本選手が表彰台を独占(4月) JTUが公益社団法人資格を取得(4月) ロンドンオリンピックでトライアスロン競技実施。女子は足立真梨子選手14位、井出樹里選手34位、上田藍選手39位。男子は田山寛豪選手20位、細田雄一選手43位(4月) ITU世界トライアスロングランドファイナルオークランド大会ジュニア女子で松本文佳選手が優勝(10月)

2013年

横浜トライアスロン大会のレガシーとして「横浜子どもスポーツ基金」が誕生し、活動をスタート(6月)

2014年

ITU世界トライアスロンシリーズ横浜大会で上田藍選手が2位(5月) ITUが25周年、JTUが20周年、トライアスロン生誕40周年を迎える。アジア競技大会仁川大会で、日本選手女子は上田藍選手優勝、井出樹里選手2位、男子は細田雄一選手優勝、田山寛豪選手2位。男女混合リレーでも日本チーム(佐藤優香・田山寛豪・上田藍・細田雄一選手)が優勝(9月)





2015年

宮崎県シーガイア周辺が国のトライアスロン・ナショナル・トレーニングセンターに指定(翌3月パラトライアスロンも認定) 國分孝雄JTU副会長が平成27年春の叙勲・旭日双光章を受章(5月) 岩手国体(トライアスロン正式競技)成年男女に監督(日体協トライアスロン指導員資格者)計2名の派遣発表(5月) 大塚眞一郎JTU専務理事(公財:日本オリンピック委員会・JOC理事)がアジアトライアスロン同盟副会長に新任(6月) 猪谷千春JTU名誉会長が2015年度世界トライアスロン殿堂入(9月) 岩城光英JTU会長が第96代法務大臣就任に伴いJTU会長を休職。國分孝雄JTU副会長が会長及び代表理事に就任(11月)

2016年

第5回JTUトライアスロン・パラトライアスロンフォーラム開催。米国から心臓外科医のローレンス・クレスウェル博士を招へい(2月) アジアトライアスロン選手権が広島県廿日市にて開催(4月) NTTがITU世界トライアスロンシリーズ(WTS)、ASTCTライアスロンアジアカップシリーズの スポンサーになる。リオデジャネイロオリンピックでは日本選手女子は佐藤優香選手15位、上田藍選手39位、加藤友里恵選手46位、男子は田山寛豪選手が出場(8月) リオデジャネイロパラリンピックでは日本選手女子は秦由加

子選手(PT2)6位入賞、山田敦子選手(PT5/西山優ガイド)9位、男子は木村潤平選手(PT1)10位、佐藤圭一選手(PT4)11位(9月) 上田藍選手が2016ITU世界トライアスロンシリーズランキング3位(9月) 国民体育大会/希望郷いわて国体で、トライアスロンが初の正式競技として開催(10月) 大塚眞一郎JTU専務理事(公財:日本オリンピック委員会・JOC理事)がITU副会長に就任(12月)

大塚眞一郎 World Triathlon副会長/JTU専務理事談話
「東京2020オリンピック・パラリンピックの開催機運もあり、当時の松野博一文部科学大臣や鈴木大地スポーツ庁長官がリオデジャネイロオリンピックのトライアスロン会場(コパカパーナ)に選挙応援に来てくれました。初めての副会長選挙は、多くの方の支援を受けましたが、猪谷千春名誉会長(IOC委員)から教わったロビイング活動の成果やチームジャパンとしての選挙活動が効果を示してくれました。」
(2016国際トライアスロン連合(ITU)マドリッド総会で副会長就任(2020・2024年再選))

2017年

和田知子JTU理事がITU女子委員長に再任(5月) トライアスロンミックスチームリレーが第32回オリンピック競技大会(2020/東京)正式競技に決定(6月) 第6回JTUトライアスロン・パラトライアスロンフォーラム開催(6月) 岩城光英氏がJTU会長に再任(6月) 大阪城の東外濠を泳ぐ大阪城トライアスロン大会がNTT・ASTCアジアカップ併設で開催(6月) 谷真海選手がITU世界パラトライアスロン選手権(PTS4クラス)で日本人初の金メダル(9月)

2018年

アジア競技大会インドネシア・ジャカルタが開催。日本は前回大会に続いて、男女個人・ミックスリレーの全3種目で金メダルを獲



得した。女子は高橋侑子選手、男子は古谷純平選手が金メダルを獲得。ミックスリレーは日本チーム(佐藤優香・古谷純平・高橋侑子・細田雄一選手)が金メダル。第18回アジア競技大会OCA(OCA/Olympic Council of Asia)総会(8月19日インドネシア・ジャカルタ)で、アジア・オリンピック評議会が新たに創設した「スポーツと環境賞」において、「ITU世界トライアスロンシリーズ横浜大会」の環境活動の取組が評価され受賞。トライアスロン競技を国内外に普及させるための活動の一環として2年間にわたるリワンダ共和国へコーチ派遣やトライアスロン用品の提供など支援を行った。

2019年

ITUワールドトライアスロン オリンピックオリフィケーションイベント(2019/東京)(東京2020オリンピック・パラリンピック テストイベント)を東京都港区お台場海浜公園で4日間にわたり開催し大成功を収めた。

2020年

新型コロナウイルス感染拡大により、ワールドトライアスロンが国際大会と事業を休止することを発表。国内では、いち早くCOVID-19国内向け運営ガイドラインを作成することによって再開することに成功。競技の「完全インターネットライブ中継」など新様式トライアスロン観戦スタイルが定着するようになった。世界的なパンデミックにより多くの大会が中止となる中、NTT東日本・NTT西日本の支援により「今、トライアスロンにできること」をキャッチフレーズにトライアスロン地域支援活動を全国展開。11月にワールドトライアスロン総会がオンラインで開催され、大塚真一郎JTU専務理事がIF副会長に再任(2期目)。以下、鈴木貴里代JTU常務理事(技術委員会)、和田知子JTU理事(女子委員会)、山根英紀JTU理事(コーチ委員会)、富川理充JTU理事(パラトライアスロン委員会)、笠次良爾JTUメディカル委員長(メディカル委員会)が選出された。

2021年

ファミリーの皆様により安全にトライアスロンライフを楽しんでいただくために“トライアスロンの安全対策を考える日”を毎年1月21日に制定(1月) アジアトライアスロン選手権が広島県廿日市にて開催。新型コロナウイルス感染拡大対策として無観客での大会運営となる。ニナー賢治選手がアジア選手権初優勝を飾った(4月) 1年延期となった、第32回夏季オリンピック競技大会/第16回夏季パラリンピック競技大会(東京/2020)開催(トライアスロン個人/トライアスロン混合リレー/パラトライアスロン:お台場コース)が開催。【オリンピック】18位:高橋侑子選手、DNF:岸本新菜選手、14位:ニナー賢治選手、19位:小田倉真選手【パラリンピック】女子PTS2 6位:秦由加子選手、女子PTVI 11位:円尾敦子選手 菊池日出子ガイド、男子PTS4 2位:宇田秀生選手、男子PTVI 3位:米岡聡選手 椿浩平ガイド、女子PTWC 9位:土田和歌子選手、男子PTWC 6位:木村潤平選手、女子PTS5 10位:谷真海選手 宇田秀生・米岡聡選手が日本トライアスロン界初のメダルを獲得する。

岩城光英JTU会長談話「日本のトライアスロンファミリーにとって悲願であったメダル獲得のチャンスがCOVID-19で一年延期となった東京オリンピック・パラリンピックで訪れました。無観客開催となったお台場の関係者スタンドから、宇田選手の銀メダル、米岡選手と椿ガイドの銅メダル獲得を見届けた時、これまでの軌跡が思い起こされると同時に感動と喜びが溢れ出しました。そしてレースを終えてメダリストとなった選手たちから「ありがとうございます」と感謝の言葉を受けたとき、その人間力にリスペクトの念を抱いたことが今も深く印象に残っています。」



2022年

従来のエイジランキングを一新し日本全国約30大会をシリーズで結んだ「JTUトライアスロンエイジグループ・ナショナルチャンピオンシップシリーズ(JTUエイジNCS)」をスタート。最終戦として日本エイジグループ選手権を宮崎県宮崎市で開催した。

祖国が戦禍に見舞われる中、5月ワールドトライアスロンパラシリーズ横浜大会に参加したウクライナ代表選手団の5名を受け入れ、大会期間中における渡航費・滞在費等の支援を行った。

2023年

6月23日愛知県蒲郡市で第31回アジアトライアスロン(AST)定時総会が開催され、AST役員選挙にて高谷正哲氏が事務総長に選出。スポーツ庁の掲げるIF・AF等の日本人役員の増加施策の成果を上げた。第19回アジア競技大会(2022/杭州)が開催。個人女子は高橋侑子選手が前回大会に続き2度目の優勝。個人男子では初出場のニナー賢治選手が初優勝。男女共に、今回のアジア競技大会で金メダル4大会連続獲得を達成(女子:2010年足立真梨子選手、2014年上田藍選手、2018年・2023年高橋侑子選手)(男子:2010年・2014年 細田雄一選手、2018年古谷純平選手、2023年 ニナー賢治選手) ミックスリレーでも、日本(ニナー賢治・高橋侑子・北條巧・佐藤優香選手)が金メダルを獲得し、3連覇を果たした。鈴木貴里代JTU常務理事(東京2020オリンピック競技大会トライアスロン競技スポーツディレクター)がミシェル・ギニュー賞を受賞し、ワールドトライアスロン殿堂入りを果たした(9月) ワールドトライアスロン専務理事のアントニオ・アリマニー氏(スペイン)が来日し、2025年から2029年までのワールドトライアスロンシリーズ・パラシリーズ横浜大会の5カ年の開催契約について新たに合意した(11月)

2024年

1月1日に発生した能登半島地震をうけ、トライアスロン義援活動を実施(1月) 2024年度から「トライアスロン安全保険(スポーツ安全保険)」を全登録会員(選手・審判員・役員等)対象に自動付帯された。4月21日アジアトライアスロン選手権を広島県廿日市にて開催。女子は高橋侑子選手、男子はニナー賢治選手が優勝。5月ワールドトライアスロンシリーズ横浜大会にあわせてワールドトライアスロン理事会を開催。7月末にはフランス・パリにて第33回オリンピック競技大会が開催。セーヌ川の水質の関係で男女同日開催となった。女子は40位:高橋侑子選手、男子は15位:ニナー賢治選手、41位:小田倉真選手。9月にはパラリンピック競技大会が同会場で開催され、男子PTWC 8位:木村潤平選手、男子PTVI 11位:米岡聡選手 寺澤光介ガイド、男子PTS4 12位:宇田秀生選手、女子PTS2 9位:秦由加子選手 で幕を閉じた。アイアンマンジャパンみなみ北海道が開催。2015年以来、9年ぶりに日本で開催されるフルディスタンスのアイアンマンレースとなった(9月)10月21日ワールドトライアスロン副会長に大塚真一郎JTU専務理事が再任(3期目) 以下、和田知子JTU常務理事(マルチスポーツ委員会)、鈴木貴里代JTU常務理事(技術委員会)、山根英紀JTU理事(ナショナルコーチ委員会)、富川理充JTU理事(パラトライアスロン委員会)が選出された。2024年10月時点JTU加盟団体のうち25団体が法人化達成。



3

日本トライアスロン選手権ヒストリー

Vol.1 歴代日本チャンピオンの軌跡！ 第1回(1995年)大会～第6回(2000年)大会

1994年4月に日本におけるトライアスロン競技統一組織が設立され、初めての日本選手権(特別協賛:NTT)が翌年から開催された。

フジテレビ系列による全国生放送で、日本トライアスロン選手権の歴史が灼熱の岐阜県長良川で華々しく開幕。この頃は、秋ではなく夏での開催であった。

初代チャンピオンに輝いたのは、女子は小林美智子選手、男子は田村嘉規選手。田村選手のランシューズでのバイク走行が注目された。

第2回大会は茨城県波崎町、第3回大会は広島県呉市周辺の瀬戸内コースで開催し、第4回大会からは再び灼熱の長良川に戻ってきた。

第6回大会までに、女子は小梅川雪絵選手が3勝、小林美智子・枇杷田深雪・中西真知子選手が各1勝、男子は星野健一選手が2勝、田村嘉規・山口博久・小原工・斎藤大輝選手が各1勝をあげた。

2000年シドニーオリンピックより、トライアスロン競技がオリンピックの正式競技に採用され、日本からも代表選手団(男女各3名)を派遣。日本トライアスロン界の大きな一歩となり、トライアスロン競技への注目度が高まる年となった。





Vol.2

お台場日本選手権がスタート! 第7回(2001年)～第12回(2006年)大会

2001年の第7回大会からは、世界都市博予定地でもあり、1997年から大会開催実績もある東京都臨海副都心のお台場に会場を移し、日本トライアスロン選手権を開催。20年後である2020年の第26回大会まで途切れることなく、お台場を舞台に開催された。

2001年は東京のど真ん中での超近代的コースが注目の大会となり、観光名所のお台場会場は一般来場者も数万人を超え、衝撃のデビューとなった。この頃は、商業施設が立ち並び展望デッキ付近のプロムナードがフィニッシュ地点となっていた。

男女ともに、オリンピックのシドニー・アテネ大会などに日本代表として出場を果たしているオリンピック勢が表彰台にあがるなどの活躍を残した。

女子は庭田清美選手(シドニー、アテネ、北京)が3勝、関根明子選手(シドニー、アテネ)が2勝、中西真知子選手(アテネ)が2勝。男子は田山寛豪選手(アテネ、北京、ロンドン、リオ)が衝撃のジュニア優勝を含め3勝、福井英郎選手(シドニー)、西内洋行選手(シドニー、アテネ)、平野司選手が各1勝という結果に。※()内は出場オリンピック大会名 現在では選手としてだけでなく、指導者・コーチとしてその名を知る方も多いであろう。



Vol.3 田山寛豪選手の連覇が続く

第13回(2007年)大会～第17回(2011年)大会

お台場の10月の風物詩となった日本選手権は、周辺のイベントと重なると10万人の観光客と来場者が集まる大会に成長した。2007年から2011年までの5大会は秋のスポーツ日和に恵まれ、ノンウエットスーツでレースが実施された。

男子は田山寛豪選手が2006年から2009年まで4連勝、通算6勝目を達成したが、2010年にその牙城を崩したのは山本良介選手。続いて2011年に細田雄一選手も1勝をあげた。女子は井出樹里選手が3勝、上田藍選手、崎本智子選手が各1勝をあげた。コースレイアウトが変更され、フィニッシュはプロムナードから現在のお台場海浜公園内の駐車場へと移された。

2008年の北京オリンピックには、男子2名(田山寛豪・山本良介選手)女子3名(井出樹里・上田藍・庭田清美選手)を日本選手団として派遣し、井出選手が日本選手団過去最高の5位に入賞。庭田選手が9位を記録した。

2009年からは国際トライアスロン連合が「Dextro Energy Triathlon -ITU World Championship Series」をスタート(現在の世界トライアスロンシリーズの前身となるシリーズ戦)。横浜大会ほか、日本のトップ選手も国内外で国際大会の出場機会が増えていった。

また2010年には、第1回目となるユースオリンピック(YOG)がシンガポールで開催され、競技初日に開催されたトライアスロン競技で佐藤優香選手が優勝。金メダリスト第1号となる快挙を達成した。

2007年～2011年は、日本国内だけでなくトライアスロン競技の世界的な成長がみられる年となった。



Vol.4 ロンドンからリオへの試練

第18回(2012年)～第22回(2016年)大会

2013年に、2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会の開催都市として東京が選ばれ、トライアスロン&パラトライアスロン競技のベニューがお台場に決まったことから、大会名を「東京港」から「お台場」に正式変更。

2014年は日本トライアスロン連合設立20周年&日本トライアスロン選手権の第20回記念大会となった。ブルーカーペットの会場セッティングが、トライアスロンの顔として定着してきたのもこの時期となる。

女子は2014年に佐藤優香選手が初優勝を飾り、2016年に上田藍選手が通算5勝目をあげる。

男子は2015年に古谷純平選手が初優勝。2016年には田山寛豪選手が通算10勝目を記録した。

この5大会期間中に新日本チャンピオンが誕生。新しくオリンピック日本代表の座を獲得した選手が出たとともに、日本だけでなく世界のトップ選手のレベルも上がり、3種目ともにハイスピードなレース展開となる場面が増えていった。





Vol.5 新たな時代に向けて

第23回 (2017年)～第30回 (2024年) 大会

2017年日本選手権前に、田山寛豪選手がエリートレースの第一線を退く決意を表明。2001年に初の日本チャンピオンに輝いてから、4度のNTTジャパンランキングシリーズチャンピオン、日本人初のワールドカップ優勝、オリンピック4大会に日本代表として選出されるなど、日本トライアスロン界を牽引し数々の歴史を刻んできた。

大会前の記者会見での宣言通り、田山選手は2017年日本選手権でも優勝。前人未踏の日本選手権11勝という大記録を打ち立て、会場を沸かした。女子は佐藤優香選手が2勝目をあげ、2018年&2019年には新チャンピオンとして女子は高橋侑子選手、男子は北條巧選手がそれぞれ2連覇を達成。新たな時代の到来を告げた。

東京2020オリンピック・パラリンピック開催に向けて、2018年にはパラトライアスロンのデモンストレーションが日本選手権スタート前に開催され、パラトライアスロンナショナルチーム・リオ大会日本代表選手がお台場を走り、多くのパラスポーツファンを魅了した。

2020年新型コロナウイルス感染症の影響を受け、競技距離をスプリントに変更し、無観客での開催となった。新様式トライアスロン観戦スタイルとして、競技の<完全インターネットライブ中継>を実施。2021年は東京オリンピック・パラリンピックが開催された影響でお台場が使用できず、宮崎県宮崎市での初の日本選手権開催となった。前年に続き上田藍選手が優勝し7度目の日本一を飾った。2022年からは東京台場に会場を戻し開催され、女子は17歳の林愛望選手が初優勝し、男女を通じて史上最年少チャンピオンが誕生した歴史的な瞬間だった。男子は小田倉真選手が自身初の日本一の称号を獲得した。

2023年、男子は二階賢治選手がスイム、バイクで先行し、最後は得意のランで独走。他を圧倒する強さを見せ3年ぶり2度目の優勝を果たした。女子は高橋侑子選手が3度目の優勝。

第30回目の節目となる2024年大会は、11月17日に日本スポーツ界のレガシーであるお台場を舞台に開催され、同日にブランドニコー東京台場で日本トライアスロン連合30周年記念式典が催された。



4

日本選手権歴代優勝者

第1回 女子優勝 **小林 美智子** 2時間15分27秒
(チームニコス)
1995年7月30日 長良川
男子優勝 **田村 嘉規** 1時間58分21秒
(西京味噌)



第2回 女子優勝 **小梅川 雪絵** 2時間4分57秒
(三田工業)
1996年9月8日 波崎
男子優勝 **山口 博久** 1時間51分18秒
(埼玉県連合)

第3回 女子優勝 **中西 真知子** 2時間10分49秒
(チームNTT)
1997年10月5日 瀬戸内
男子優勝 **星野 健一** 1時間54分32秒
(千葉県連合)

第4回 女子優勝 **枇杷田 深雪** 2時間15分38秒
(大阪信愛女学院短大)
1998年7月26日 長良川
男子優勝 **星野 健一** 1時間56分06秒
(東京都連合)

第5回 女子優勝 **小梅川 雪絵** 2時間09分51秒
(チームテイケイ)
1999年8月8日 長良川
男子優勝 **小原 工** 1時間56分34秒
(チームテイケイ)

第6回 女子優勝 **小梅川 雪絵** 2時間13分34秒
(チームテイケイ)
2000年7月30日 長良川
男子優勝 **斎藤 大輝** 2時間01分02秒
(アラク)

第7回 女子優勝 **関根 明子** 2時間03分21秒
(NTT東日本・NTT西日本)
2001年10月21日 東京港
男子優勝 **田山 寛豪** 1時間53分04秒
(流通経済大学)

第8回 女子優勝 **中西 真知子** 2時間05分47秒
(NTT東日本・NTT西日本)
2002年10月27日 東京港
男子優勝 **福井 英郎** 1時間51分44秒
(ジャクリー・稲毛ITC)

第9回 女子優勝 **庭田 清美** 2時間00分27秒
(アシックス・ザバス)
2003年11月9日 東京港
男子優勝 **西内 洋行** 1時間49分43秒
(チームテイケイ)



第10回 女子優勝 **関根 明子** 2時間00分57秒
(NTT東日本・NTT西日本)
2004年10月24日 東京港
男子優勝 **田山 寛豪** 1時間49分07秒
(チームテイケイ)



第11回 女子優勝 **庭田 清美** 2時間00分01秒
(アシックス・ザバス)
2005年10月23日 東京港
男子優勝 **平野 司** 1時間49分30秒
(関西大学)



第12回 女子優勝 **庭田 清美** 1時間59分09秒
(アシックス・ザバス)
2006年10月22日 東京港
男子優勝 **田山 寛豪** 1時間49分33秒
(チームテイケイ)



第13回 女子優勝 **上田 藍** 2時間01分56秒
(ジャクリー・グリーンタワー・稲毛インター)
2007年10月21日 東京港
男子優勝 **田山 寛豪** 1時間49分17秒
(チームテイケイ)



第14回 女子優勝 **井出 樹里** 1時間59分01秒
(トーシンパートナーズ・チームケンス)
2008年10月26日 東京港
男子優勝 **田山 寛豪** 1時間48分46秒
(流通経済大学職員・チームプレイブ)



第15回 女子優勝 **井出 樹里** 2時間00分31秒
(トーシンパートナーズ・チームケンス)
2009年10月18日 東京港
男子優勝 **田山 寛豪** 1時間51分03秒
(NTT東日本・NTT西日本/流通経済大学職員)





第16回 女子優勝 **崎本智子** 1時間56分00秒
(日本食研)
2010年 男子優勝 **山本良介** 1時間46分10秒
10月17日 (トヨタ車体)
東京港



第23回 女子優勝 **佐藤優香** 1時間59分58秒
(トーシンパートナーズ・NTT東日本・NTT西日本・チームケンス)
2017年 男子優勝 **田山寛豪** 1時間51分34秒
10月15日 (NTT東日本・NTT西日本/流通経済大学職員)
東京・台場



第17回 女子優勝 **井出樹里** 2時間01分31秒
(トーシンパートナーズ・チームケンス)
2011年 男子優勝 **細田雄一** 1時間49分21秒
10月16日 (グリーンタワー・稲毛インター)
東京港



第24回 女子優勝 **高橋侑子** 1時間59分50秒
(富士通/東京)
2018年 男子優勝 **北條 巧** 1時間46分37秒
10月14日 (日本体育大学)
東京・台場



第18回 女子優勝 **上田 藍** 1時間55分07秒
(ジャクリー・グリーンタワー・稲毛インター)
2012年 男子優勝 **田山寛豪** 1時間44分14秒
11月11日 (NTT東日本・NTT西日本/流通経済大学職員)
東京港



第25回 女子優勝 **高橋侑子** 1時間59分12秒
(富士通/東京)
2019年 男子優勝 **北條 巧** 1時間47分19秒
10月6日 (博慈会・NTT東日本・NTT西日本/東京)
東京・台場



第19回 女子優勝 **上田 藍** 1時間59分25秒
(ジャクリー・グリーンタワー・稲毛インター)
2013年 男子優勝 **田山寛豪** 1時間47分59秒
10月13日 (NTT東日本・NTT西日本/流通経済大学職員)
東京港



第26回 女子優勝 **上田 藍** 57分35秒
(ペリエ・グリーンタワー・ブリヂストン・稲毛インター/千葉)
2020年 男子優勝 **ニナーケンジ** 51分09秒
11月8日 (NTT東日本・NTT西日本/山梨)
東京・台場



第20回 女子優勝 **佐藤優香** 1時間58分59秒
(トーシンパートナーズ・チームケンス)
2014年 男子優勝 **田山寛豪** 1時間48分43秒
10月26日 (NTT東日本・NTT西日本/流通経済大学職員)
東京港



第27回 女子優勝 **上田 藍** 2時間4分35秒
(ペリエ・グリーンタワー・ブリヂストン・稲毛インター/千葉)
2021年 男子優勝 **細田雄一** 1時間51分58秒
10月23日 (博慈会/東京)
宮崎



第21回 女子優勝 **上田 藍** 1時間59分43秒
(ジャクリー・グリーンタワー・稲毛インター)
2015年 男子優勝 **古谷純平** 1時間49分49秒
10月11日 (三井住友海上)
東京港



第28回 女子優勝 **林 愛望** 2時間1分22秒
(岡崎城西高校・まるいち/愛知)
2022年 男子優勝 **小田倉真** 1時間48分24秒
10月9日 (三井住友海上/東京)
東京・台場



第22回 女子優勝 **上田 藍** 2時間3分07秒
(ペリエ・グリーンタワー・ブリヂストン・稲毛インター)
2016年 男子優勝 **田山寛豪** 1時間52分01秒
10月9日 (NTT東日本・NTT西日本/流通経済大学職員)
東京・台場



第29回 女子優勝 **高橋 侑子** 2時間1分11秒
(相互物産/東京)
2023年 男子優勝 **ニナー賢治** 1時間48分29秒
10月15日 (NTT東日本・NTT西日本/山梨)
東京・台場



5

IRONMAN Japan

世界最大規模&最古のロングディスタンスレース「IRONMAN」。このレースが生まれたきっかけは、ハワイの海兵隊員が宴会の席で交わした「ワイキキ2.4マイル・ラフウォータースイム(3.86km)、アラウンド・オアフ112マイル・バイクレース(180km)、ホノルルマラソン(42.195km)のうちどれが最も過酷か?」という議論であったという(いずれも当時ハワイで行われていた耐久レース)。結局比較しても結論は出ず、出た提案が「いっそ3つの競技をまとめてやってみよう」というもの。そんな、半ば冗談のような勢いで実施された大会が、やがて多くの感動と興奮を生む競技へと成長したのだ。

そして1985年6月30日、日本の中央部に位置する滋賀県の彦根市、長浜市、余呉町などを舞台に、日本初開催のアイアンマンレース「アイアンマンジャパンinびわ湖大会」が開催された。大型台風の直撃にともなう水温低下や大雨が選手に襲いかかるなか、366人が完走を果たし、日本で初のアイアンマンが誕生したのだ。

大会はその後もびわ湖で1997年まで毎年開催され、それ以降は2001~2009年開催の「アイアンマン・ジャパントライアスロン五島・長崎大会」、愛知県常滑市で2010年から2020年まで開催された「アイアンマン70.3セントレア常滑ジャパン」、北海道で2013年から2015年まで開催された「アイアンマン・ジャパン北海道大会」、2023年開催の「アイアンマン70.3東三河ジャパンin渥美半島」、そして2024年





に木古内町で開催された「アイアンマンジャパンみなみ北海道大会」と歴史を重ね、アイアンマンレースのみならず、トライアスロン競技全体の知名度の拡大や、競技レベルの向上にも貢献していった。

選手の活躍としては、黎明期の日本トライアスロン界を支えた中山俊行選手が、1984年のアイアンマン世界選手権（ハワイ）で総合17位までのぼりつめた。1988年には、宮塚英也選手がアイアンマン世界選手権（ハワイ）で総合9位、1994年の世界選手権でも10位という記録をあげ、日本人で唯一のトップ10入りという快挙を2度に渡って成し遂げた。

また、2012年には稲田弘選手が80歳でアイアンマン世

界選手権（ハワイ・コナ）初完走・年代別優勝。70歳でトライアスロン、76歳でアイアンマンレースを始めた、まさに「鉄人」だ。その後、2016年（当時83歳）、2018年（当時85歳）に年代別世界王者タイトルを獲得。80代で3度の優勝という偉業は2020年7月に2つのギネス世界記録™に認定された。そして2024年現在は、12月開催予定のアイアンマン西オーストラリア大会に新設された「90歳以上の部」での勝利を目指し、練習に励んでいる。

稲田選手はギネス世界記録™認定時のコメントでこう述べた。「『何歳まで』というリミットは考えていない。」総距離約226kmにもなる、この過酷極まりないレースに参加する選手も、その姿に熱狂し応援する人々も、この精神に共感するに違いない。限界を決めずに挑戦し続けることの尊さに、我々は惹かれてやまないのだ。



6

オリンピック・パラリンピック

人類最大のスポーツの祭典、オリンピック・パラリンピック。近代オリンピックの父と呼ばれるピエール・ド・クーベルタン男爵は、オリンピズム=オリンピックの精神について「スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献する」と述べた。世界各国で親しまれ、限界に挑む姿に感動を与えられるトライアスロンという競技は、まさしくオリンピズムを体現している競技であると言える。

世界有数のトライアスロン大国である日本は、トライアスロンがオリンピック・パラリンピック競技として採用されて以降、

すべてのオリパラ大会のトライアスロン競技に出場してきた。2008年北京オリンピックでは井出樹里選手が5位となり、日本トライアスロン史上初の入賞を果たした。井出選手は後に「スタートのポンツーンに立ったとき『一人ではない』ことを感じましたし、レース中に『樹里』と何度も声をかけられて、それが最後まで自分の背中を押してくれました。」と語っている。井出選手の強靱な心身と、周りとの連帯感が生んだ結果であった。

また母国開催となった東京2020パラリンピックでは、待望のメダリストが2人誕生した。男子PTS4では、宇田秀生選手が銀メダルを獲得。オリンピックも含めて、日本トライアスロン





史上初のメダルとなった。男子PTVIで銅メダルを獲得した米岡聡選手は、視覚障がいクラスの日本人メダリスト第1号となった。宇田選手は後に「ゴールする直前からいろいろな気持ちが込み上げてきて、こらえるのにいっぱいだった。最後はすごく幸せなストレートでした。」と語った。米岡選手は視覚障がい者マラソンの伴走者に偶然声を掛けられたのをきっかけにマラソン競技を始めたという、運命の出会いが表彰台へと繋がった。努力、挑戦、そして人との繋がりが生んだ2人の偉業に、未来のオリンピック・パラリンピアンも続くことができるよう願うばかりだ。



7

未来へ ～挑戦を超えた可能性の先へ～

水面を切り裂くように泳ぎ、風を感じながら自転車で駆け抜け、そして最後に地面に足を刻みながら走る。そしてフィニッシュラインを越えた瞬間に全身で感じる達成感、他の何ものにも代えがたい。自分と戦い、仲間と支え合い、乗り越えた者だけが味わえる深い感動が待っている。だからこそ、応援する側においても勝ち負けや順位を気にせず、自分自身に挑戦する姿に感情が揺さぶられ、トライアスロンの精神に魅了されていくのではないだろうか。

その競技性は、世界中の人々の夢が共鳴し、感動と興奮が巻き起こる世界最大のスポーツイベント「オリンピック・パラリンピック」においても、それぞれ2000年シドニー、2016年リオデジャネイロから正式競技となり、現在ではいずれも中核競技として確固たる地位を築いている事でも証されている。選手強化のみならず、ワールドトライアスロン・日本トライアスロン連合はこのビッグイベントの開催運営にも携わり、東京2020オリンピックでの男女混合リレー等の革新的な取り組みは、国際オリンピック委員会 (IOC) や国際パラリンピック委員会 (IPC) からも高い評価を得ている。

これまでの歴史を紡ぎ、日本トライアスロン連合は設立30周年を迎えた。この節目に、私たちは強化と普及は一体であるという指針の下、「だれもが生涯スポーツとして健康的にトライアスロンを楽しむ」世界の実現を目指すことを宣言する。

- ・オリンピック・パラリンピックでのメダル獲得
- ・健康を基軸とした生涯スポーツとしての普及事業とイメージの醸成
- ・地域ごとのコミュニティを育みながら、社会課題の解決と活性化に向けたアプローチの実施
- ・日常的にトライアスロンに触れて感じてもらうためのリレーションの展開

トライアスロンはスイム・バイク・ランという3種目を通じ、自分自身に挑むことで心と身体の成長を追求するスポーツだ。私たちは、持続可能な環境への配慮、最新技術の導入、多様性の尊重等を通じて、すべての挑戦者がその可能性を最大限に発揮できる場を提供し、より多くの人がこの挑戦に参加し、自分の可能性を信じて一歩を踏み出せる世界を創造したい。

次世代へと繋がるトライアスロンの発展に力を注ぎ、挑戦する心や夢とともに未来へ。



オフィシャルパートナーの皆様方の
温かいご支援に、深く感謝申し上げます。

JTU OFFICIAL TOP PARTNERS



JTU OFFICIAL PARTNERS



Special thanks to: Marisol Casado, Chiharu Igaya, Mitsuhide Iwaki,
Kiyoshi Ookubo, Masao Nakayama, Fumitake Shimada, Shin Otsuka,
Tomoko Wada, Imao Takahashi, Toshiyuki Nakayama, Yusuke Kikuura,
Mikiko Yokoyama, Shugo Takemi, Satoshi Takasaki, World Triathlon,
Asia Triathlon, SEIBIDO, Triathlon Japan, Yokohama LOC



30th Anniversary | Triathlon Japan

1994-2024 and Beyond

日本トライアスロン連合 **30周年記念**